



言葉凸凹 明所視と暗所視

明るい処で、周囲を視る状態を明所視といい、逆に暗い処で周囲を視る状態を暗所視という。明るい処から暗い処に入ると、初めはものが見えにくいが見えてくる。

明所視は照度で数ルクス以上、輝度では数cd/m²以上の明るさで、網膜にある3種類の錐体が働いて、周囲を視る時は、短い波長の色を感じるS錐体、中間の波長を感じるM錐体、長い波長を感じるL錐体が働くために、明所視では色を区別して感じることができる。この状態を明順応という。

一方、暗所視は照度で0.01ルクス以下、輝度でおおよそ0.001cd/m²ぐらいの暗いレベルで視る状態をさす。星明かりで見えるような状態なので、物の形はおぼろに分かるが、色は見えない。視細胞の桿体だけが働き、この状態を暗順応という。しかも桿体は錐体に比べて、網膜上に粗くしか分布していないために、形の分解能もよくない。

急に電気を点けたり、消したりすると明順応や暗順応をするための時間が必要になる。

これが人間の視覚である。色を正確に判断し、判定をする場合には、照度あるいは輝度を高くして、順応を待って作業をする必要がある。(永田泰弘)

●城一夫名誉会員を偲んでー5

城一夫著「日本の色のルーツを探して」
パイ インターナショナル発行 1,980円
初版：2017年3月19日

日本の伝統色といわれる色彩はどのように生まれ来て変化していったのだろうか。日本の色彩文化のルーツと流れを探る著である。

「いろ」という語源の紹介に始まる第一部では、古代日本人の色彩認識、神話における色、自然の色への畏敬、陰陽五行説や仏教文化の受容、近世以降の西洋文化の流入、といった要素を切り口に、日本の色彩の源流と成り立ちをまず俯瞰的に紹介している。

続く第二部では、14の色相(色系統)について古代より現代に至るまで、その系譜を多様な視点からエピソードとカラー実例を交えて次々と辿っていく。固有の文化、自然、風俗、美意識などと混じり合い育まれた日本の色が時代や場面ごとにさまざまな様相を見せてきたことが浮かび上がり、日本の色のルーツを辿る旅物語ともなっている。

新刊発行されて間もない頃、著者による「色で読み解く日本の美」と題する講演会が百名を超える一般の聴講者向けに行われ、会場に置かれた本書を多くの方々が手に取っていたことが思い出される。(荘 真木子)

●大辞泉ひろいよみ 12ーい

色柄：いろがら。布地などにいくつかの色で染め出した模様。

色ガラス：着色ガラス。

色革：いろがわ。着色したなめし革。染め革。

色河原：いろがわら。近世、京都四条河原のこと。芝居小屋があり、男色を売るものがいたことからいう。

色変わり：色が変わること。また、そのもの。変色。形や模様が同じで色が変わっていること。また、そのもの。色違い。種類が変わること。風変わりであること。色直しに同じ。

色気違い：いろきちがい。色情狂。ひどく好色なこと。また、その人。好色家。

色釉：いろぐすり。陶磁器の上絵をかくのに用いる。

色狂い：女色におぼれ、放蕩すること。

色黒：いろぐろ。色、特に肌の色が黒いこと。また、そのさま。

色気：いろけ。色の加減。色の調子。色合い。異性に対する関心や欲求。色情。人をひきつける性的魅力。愛嬌。愛想。おもしろみ。風情。女性の存在。女っ気。

色気より食い気：色欲よりも食欲の方が先であること。見えを捨てて実利を取ること。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)